

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2116 号

The Prognostic Impact of Differentiation at the Invasive Front of Biliary Tract Cancer

(胆道癌における腫瘍浸潤先進部の分化度は予後因子である)

大久保 悟志 (おおくぼ さとし)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、胆道癌根治切除を受けた症例の病理標本を用いて、胆道癌の各部位（肝内胆管癌、肝外胆管癌、胆嚢癌、十二指腸乳頭部癌）に共通する、原発巣に関する病理学的な予後因子を腫瘍の浸潤先進部に着目して探索した論文である。解析対象患者数は 299 名であり、内訳として肝内胆管癌患者 47 名 (16%)、肝外胆管癌患者 144 名 (48%)、胆嚢癌患者 50 名 (17%)、乳頭部癌患者 58 名 (19%) であった。腫瘍浸潤先進部の分化度が低分化であったものは 141 名 (47%) に認め、先進部が高/中分化な症例に比べて脈管侵襲やリンパ節転移の頻度が多く認められた。生存期間の中央値は全解析対象患者では 51.5 カ月で、浸潤先進部低分化症例では 31.4 カ月、浸潤先進部高または中分化症例では 108.0 カ月であり、有意に浸潤先進部低分化症例で短かった。多変量解析において腫瘍浸潤先進部低分化症例は独立した予後不良因子であり、早期再発因子であった。胆道癌の予後因子解析において、原発巣に関する予後因子で胆道癌の各部位に共通する予後不良因子は過去に報告はなく、本論文で新たな知見となった。また、リンパ節転移陽性集団や各原発部位の集団においても予後判別能は保たれていることから今後の胆道癌根治切除後の患者のマネージメントや臨床試験などの層別因子の設定等において有用な指標になり得ると考えられる。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。